
魔法戦記リリカルなのはForce ~World Zero~

IKA

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法戦記リリカルなのはForce ｝World Zero｝

【Nコード】

N1985BA

【作者名】

IKA

【あらすじ】

相良翔が世界を救い、2年が経った。彼は様々な想いを胸に、一人旅をしていた。そんな彼が巻き込まれる事件。彼を忘れている者、覚えている者達が、彼を様々な想いを胸に・・・探す。そして相良翔が出会った一人の少女と、新たな力 その力が、新たな物語の幕開けだった。

誓いの始まり（前書き）

遂に始めました。

この作品もコラボはやりま〜す！！！！！！！！！！

コラボしてみたいと言う先生はいつでもどうぞ……！！！！！！

誓いの始まり

相良翔が世界を変えて二年後、彼は旅に出た。

理由は『宇宙に浮いたままだと世界が見えないから、もっと色々な世界を見に行ってくる』と言う、彼らしい理由だった。

彼の唯一の愛人であるルチアは相良翔の代理として陸宙管理本部総裁を務めることになり、ギンガ・ナカジマはその補佐となる。

ヴァン・スカイとリオナ・カミナは現在、階級が上がって11歳にも関わらず、一等空尉へ昇進した。

更にヴァンは本人の希望で『執務官』になった。

現在はフェイトやティアナ達と共に事件に立ち向かっているらしい。

エトワールは陸宙管理本部でルチアと共に戦いの道を進んでいる。

音使奏多は、何故かこの世界が好きになってしまい、この世界に滞在することになったらしい。

芳乃零二は事件終結後、地球に帰還して紗雪、なぎさ、サクラの4人で明るく生活している。

ヴィヴィオはコロナ、リオの二人と3人仲良く学園生活と格闘技を楽しんでいる。

高町なのはやフェイト・T・ハラウンや八神はやてなどは教導官や執務官、ロストログア関係の調査などを行っている。

・・・ま、なのは達は俺の事・・・忘れてるけどな。

相変わらず平和だと言えば平和だ。

平和と言うものは長続きしない。

何故なら人々は、平和に飽きるから。

そして人は新たな刺激を求めて、結果として戦争が生まれる。

だとしたら、どんなに平和な世界を作ろうとも、全て零に戻されてしまう。

相良「ま、そんなことはどうでもいいけどな」

平和を思わせるような青空を、ルヴェラ鉱山遺跡付近で仰向けになりながら見上げる俺、相良翔。

ロード「マスター。独り言とは珍しいですね」

相良「うっさい。話せる奴がデバイスしかないんだ」

マルス「すみません」

メルキュール「人に変形出来れば良かったですね」

相良「そ、それは無茶だろ」

ロードはその後、修理で再び俺の相棒となった。

俺の首には白銀、紅、蒼の宝石を三つをぶら下げていた。

俺がこの遺跡に来た理由は様々。

相良「なあ？ やっぱり・・・あれは、事故だったのか？ 事件だったのか？」

俺は過去のある事件か事故なのか曖昧な事を調べるためと言つのも旅のもう一つの理由だった。

ロード「私達からではなんとも言えません。ですが、調査しなければ・・・死者が報われません」

相良「・・・そうだな」

それだけは、確かなことだからな。

相良「さて・・・遺跡に入るか・・・って・・・ん？」

近くに寄ると、銃などを武装した兵隊や、研究員らしき人々が集まっていた。

何かの実験か？・・・なんか・・・嫌な予感がするなおい・・・

ロード「マスター。あの遺跡の奥に生命反応があります」

相良「生命反応？」

マルス「ですが・・・この反応は・・・」

メルキュール「実験の後・・・生体実験のようですが・・・」

相良「生体実験だと？」

まさか・・・この遺跡・・・

痛いよ！！！

相良「っ！？」

突如、俺の頭の中に悲痛な叫びが響きわたる。

苦しいヨ！！

相良「うう・・・」

ズキズキと痛む頭。

・・・ここまで悲痛な念話は初めてだ。

相良「・・・行くぞ」

ロード「2年ぶりですね」

相良「ああ。じゃ、行きますか」

そう言つて俺は武装している監視達にバレないように素早く中に忍び込んだ。

相良「・・・なっ!？」

奥に入って最初に驚いた事、それは・・・

相良「生体・・・ポット・・・」

ジェイル・スカリエッティの実験場の様な・・・そんな感じに左右に整体ポットがあつた。

相良「遺跡に見せかけた研究施設か・・・」

ロード「それも・・・相当ヤバイ類ですよ」

全く、平和がどうこう言つてられないな。

相良「この奥に・・・声の人が・・・」

俺は固く閉ざされていた扉を解除して、中に入る。

そこに居たのは、全裸で両手を拘束された長い髪の少女だった。

相良「なっ……」

俺は急いで外しに向かおうとした。

ロード「マスター！」

相良「っ！？」

だが、突如俺の瞳が痛み、頭痛が発生する。

相良「まさか……リアクティングか……」

マルス「ご主人様！大丈夫ですか！？」

相良「……ああ。それに、今ので外の奴らに気づかれた。早く……
あの子を……」

だめ……痛いよ……怖い……寂しいよ……

彼女の心の声が聞こえる。

来ちゃだめ!!!

相良「・・・嫌だね!」

そう言っ
て俺は、彼女に近づく。

彼女は泣いていた。

相良「大丈夫・・・泣く必要は、ない!!」

そして俺は激しい頭痛に耐えながら、彼女の頬に右手を伸ばす。

相良「寂しかったんだね。もう、大丈夫だよ」

無理しながら笑を作ると、彼女は笑顔になり、俺に抱きついた。

相良「おっと・・・」

メルキユール「今、ルチアさんにこの状況を通報しますよ？」

相良「や、止めてくれ。ばれたら・・・死ぬ。そこで、取り敢えず服を！」

そう言っただけは傍にあった衣服をとり、彼女に着せる。

『警告！警告！感染災害の危険発生！！』

相良「感染？」

何だ・・・何が起こってるんだ！？

ロード「マスター！全ての通路が封鎖され、施設内温度が急激に上昇しています！」

マルス「熱焼却処理機能が発動した可能性があります！」

相良「分かった メルキュール。俺に力を！」

メルキュール「はい！」

俺は蒼の宝石、メルキュールを天井に掲げると、そこを中心に俺たちに蒼い魔力のフィールドが出来る。

相良「取り敢えず、これで凌いで、準備が出来次第ここから脱出するぞ」

そう言って俺は彼女をお姫様抱っこで抱きかかえ、不安そうな表情の彼女に言う。

相良「心配するな。言っただろ？一人にしないって。もう・・・寂しい思いはさせない」

そう言って俺はしばし粘る。

相良「つつ・・・やべ、久しぶりだから体鈍ってんじゃねえかよ」

苦笑いしつつも、辛いのは変わらない。

??「・・・！」

相良「え・・・」

その時

彼女が俺の右手を引いた。

誓約
エンゲージ

その瞬間、施設は大爆発する。

俺は

右手を構える。

そこに、刃がついた一挺の銀色の銃が持たれる。

《E - C
D i v i d e r
C o d e - 9 9 6
》

その銃は、
起動する！！

《

S
t
a
r
t

U
p

》

相良
□

デ
ィ
バ
ィ
ド
・
ゼ
ロ

□

その瞬間、銃から俺が今まで放ったことのない強力な砲撃魔法のよ
うな弾丸が放たれ、それは遺跡を貫き、空を駆けた。

ロード「マスター……」

マルス「一体……何が……」

メルキュール「……こんな姿……」

俺は、瞳を血の様に赤く染め、黒騎士を思わせるような・・・そんな服装になっていた。

天使が

堕天使に変化した瞬間でもあった。

誓いの始まり（後書き）

この作品にトーマは登場しません。

そして原作通りの物語りですが、途中から完全オリジナルになります。

感染者は相良翔になってしまいました。

これによって、記憶を忘れているなのは達と、新たに設立される『特務六課』。

相良翔を覚えている『陸宙管理本部』。

そして後に登場する『フツケバイン一家』。

相良翔と一人の少女が紡ぎ出す新たな物語りが始まります。

感想として下さい。

誤字脱字はいつもどおり多めですのでご注意ください（・・・・・）

新たな仲間（前書き）

とりま、小説スタートですね。

いろんな意味で内容が変化していく今作品。

リリースフラグも含めて、お楽しみください。

新たな仲間

相良 Side

相良「・・・？」

あれ・・・俺・・・一体何が・・・って!?

相良「な、なんじゃこの格好!？」

え!?!俺が真つ黒につ!?!似合わね!!

ロード「なんですかマスターそのイカした格好は？」

相良「そもそも、この銃は一体・・・」

そう言っていると、銃や俺の服装は魔力の粒子となり、右手首に巻き付く。

相良「つつ・・・これは・・・」

右手首に出来たのは、純銀のリング。

マルス「また何やら巻き込まれたみたいですね」

相良「あはは・・・まあ性分だよね」

もう仕方ない。

だが・・・この腕輪は・・・

??《・・・》

相良「あ、大丈夫？怪我はない？」

??《・・・（コクッ）》

無言で頷く所を見ると、大丈夫そうだ。

相良「俺は相良翔。君の名前は？」

ロード「私はロード」

マルス「マルスです」

メルキュール「メルキュールです」

リリイ《リリイです。リリイ・シュトロゼック》

念話・・・彼女は、喋れないのか・・・

相良「リリイ・・・可愛い名前だね。よろしくね」

リリイ《・・・（うるうる）》

相良「うを!？」

リリイは感極まって俺に抱きついてきた。

相良「……」

俺は無言でリリイの頭を撫でる。

それは、彼女自身が背負っている心の傷があることを悟ったことだったのは、言うまでもない。

ロード・マルス・メルキュール「……」（浮気だ……絶対に浮気だ・……）「……」

相良「……あ、あそこにけが人がいるな……ロード。ここ周辺の怪我人を教えてくれ。人によつては応急処置が必要かもしれない」

ロード「ですがマスター。今すぐこの場を離れないと、追つてがきます」

相良「そんなことはどうでもいい。今は、助けられる命を優先するべきだ」

リリイ《私は大丈夫》

リリイは俺の想いを理解してくれたのか、了解してくれた。

相良「分かった。リリイは何があっても守るから安心してくれ」

リリィ《うん》

そう言って俺達は倒れている怪我人達の治療をし、その遺跡をあとにした。

同時刻、第12管理世界フェディキア St・ウレリー港

ヴァン Side

シャーリー「お疲れ様ですフェイトさん、ティアナ執務官。それに、ヴァン執務官も。押収物には該当しそうな品はありませんでした」

フェイト「そう。銀十字もディバイダーもここじゃなかったか」

ティアナ「『エクリプス』の感染者を出すわけにはいきません」

フェイト「うん」

ヴァン「もしも感染者が出た場合・・・なんとしても、捕獲しないと・・・」

シャーリー「執務官を総動員しても、未だ見つからないなんて・・・」

ヴァン「・・・」

僕たちは港火災の現場を訪れるが、目的のものは見つからない。

ただ・・・

フェイト「ヴァン。どうかしたの？」

ヴァン「・・・いえ。戻りましょう。捜査報告をしなければいけま

せんし」

ティアナ「そうね」

そう言って僕たちは帰還する。

ヴァン「（嫌な風だ・・・なんか、戦前の静けさにも似てるし・・・それに、何か胸騒ぎがする）」

そんな想いを持ちながら、僕達は帰還するのだった。

同時刻、陸宙管理本部。

ルチア S i d e

音使「ヴァンからの捜査結果はこれで終わりだ」

ルチア「そう・・・そうになると、既に感染者が出てる可能性があるね」

私と奏多は執務官兼陸宙管理本部魔導士のヴァンの報告を受けた。

私達、陸宙管理本部も『エクリプス』と『銀十字』の調査をしている。

それは、様々な危険の対象だから。

そして “彼女”が動いているから。

ルチア「・・・こんな時、翔だったら、もっとちゃんとしてたのか

な？」

音使「どうだろな。いない人の話しをしてもどうにもならないさ」

ルチア「・・・うん。そうだね」

奏多も、翔の存在を覚えている人の一人。

だから、こんな本音を聞いてくれるのは限られている。

音使「今・・・どこで何してるんだろうな」

ルチア「うん。事件に巻き込まれてなければいいんだけど・・・」

相良 Side

相良「（＜＞、；… イクシッ」

ロード「風邪ですか？」

相良「いや、そんなはずは…。」

リリイ《（-|-）。zzz…》

俺達の出逢って最初の夜は野宿となった。

焚き火の火を見つめながら、俺は追ってがこないかと起きている。

リリイは安心してきってか、または緊張から解放されてかで俺に膝枕をされてぐっすり眠っている。

相良「…。」

膝枕なんて久しぶりだな…。

2年くらい前までは、普通の事で、俺の方がよくされてた・・・

・・・って、やべ。急に寂しくなってきた。

相良「はぁ・・・」

リリイ《・・・》

相良「・・・っ」

突然、太ももに冷たい水滴がついた。

相良「泣いてる・・・のか」

リリイは眠っている間、少し泣いていた。

それは、あんな研究所で捕まって、色々辛いことがあったからだろう。

相良「・・・」

俺は、そんなリリイの頭を撫でてやることしか・・・出来なかった。

相良「・・・こういつときの俺は、ほんとに無力だよな」

ロード「いえ。今できる、最善の事だと・・・私は思います」

相良「ありがとう。ロード」

そうやって、俺は夜が明けるまでリリーの頭を撫でてあげるのだった。

聞きたいことは、いっぱいある。

昨日の研究所で俺に起こった事。

あの様な姿になった理由や、あの研究所で何が行われていたかとか・
・・・

でも、それは今聞くのは辛い。

別に、今聞くことではないだろう。

時間はいっぱいあるんだ。

しっかり、時を待ってしよう。

それまでは、俺が必ずリリーを護るんだ。

寂しい思いなんて・・・二度とさせないために。

もう．．．昔の俺みたいな、孤独な人間を．．．なくすため．．．
に．．．

相良「．．．ん？」

リリイ《あ．．．起きた？》

目が覚めると、俺は仰向けで寝ていた。

後頭部に柔らかい感覚・・・それに、リリイの顔が近いな・・・つて・・・え？

相良「ん？ん？」

リリイ《？》

ちよつと待て俺。状況を整理しよう。

1、俺は寝ていた。

2、俺はリリイに膝枕されて寝ていた。

3、今は朝。

・・・よし。OKだ！

相良「・・・いや、どこもOKじゃないな」

そう言つて俺は上半身を起こす。

相良「おはよう、リリイ。ごめんな、膝痺れただろ？」

リリィ《（フルフルっ）シヨウの寝顔、見れたから。おはよう》

相良「あ・・・あはは・・・」

なんと不甲斐ない。

取り敢えず、朝になったし、町を探すとしますか。

相良「よし。行くかつと」

そう言つて俺はリリィをおんぶして歩き出す。

俺たちがいる世界は、ミッドチルダの様な先進都市とは違い、いかなれば田舎のような場所。

人が自然と共に暮らす辺境世界もあるなか、俺たちのいるここ、『第23管理世界ルヴェラの文化保護区』もまた、古き良き暮らしを愛する者たちが暮らす地区だ。

相良「やべ、リリィ。腹減ったから、走るぞ」

リリィ《うんうん》

そう言つて俺は両足に魔力を練り、瞬間的に爆発させて移動速度を上昇させて走り出す。

相良「街だゝ！！早く飯をゝ！！」

ロード「確かここは海産物が美味しいそうですよ。焼き貝に魚介スーぷ・・」

相良「言わんでいい。俺の腹をどうしたい？」

移動も通信も、ミッドなどと違って極めて不自由だけど、都会を忘れて豊かな自然とともに過ごせる土地だから、落ち着く。

相良「そう言えばリリィもお腹空いてる？」

リリィ《うん》

そう言つと、リリィの腹がぐうううゝと鳴った。

相良「あはは。ほんとだ！よし、そんなじゃ・・ダゝゝッシュ！！！」

そう言って魔力を使わず、街を走り出す。

リリィ《〜？》

街の人々があたたかな目で見ていたのはちょっと恥ずかしかったけどね。

俺たちがいるのはルヴェラ北部の港町。

街にいる人に色々と情報を聞く。

おばさん「次元通信？そんなハイカラなもんはここらにやないねえ」

相良「ですよね・・・」

やっぱりこの世界じゃいろんな奴らに協力を頼むのは難しいか・・・

おばさん「はい、貝焼き串おまたせ！」

相良「あ、ありがとうございます！」

そう言つて俺は貝焼きが刺さつた串を二本と、他の買った物を持つてリリイのいる場所に向かう。

相良「取り敢えず・・・リリイの服と靴かつて教会まで歩くか」

教会に行く目的は、陸軍管理本部にいるヴァンと通信をとつて、一度現状を説明するためだ。

山の向こうに教会があるらしいからな。

リリイは救出してから裸足だったから背負つて歩いていた。

まあ見た目的に危ないので露出少なめの服が欲しい所だ。

相良「リリイ。お待たせ」

リリイ《〜〜》

リリイに貝焼き串を渡すと嬉しそうに食べ始める。

相良「んぐ・・・おお、ロードのデータ通り美味しいな」

ロード「でしょ？」

なんか胸張ってる・・・まあ今回は感謝か。

相良「それで、休憩宿ならそこらへんにあるとして、服屋は無いかな？」

マルス「それでしたらあの辺の一角は自由市場フリーマーケットのようです」

相良「ほお・・・そんじゃリリイ。食べ終わったら行こう」

リリイ《うんうん》

そう言っただけでリリイは食事を終え再びおんぶしてフリマに入っていく。

相良「凄い賑やかだな・・・」

商品の種類も様々だ・・・

???「はいいらっしやうい 素敵な衣装にアクセサリ」

相良「お・・・服屋だ・・・」

若いな・・・あの子、学生かな・・・」

相良「あの、靴と服買いたいんだけど？」

???「はいはい！うちは良いのあるよー！」

元気そうな子だ。

???「服と靴のサイズはどんくらい？」

相良「あ・・・えーつと・・・」

リリーのだしな・・・でもリイは念話でしかしゃべれないし・・・

???「（・・・ふむ）んじゃーまずはサイズ測ろつか！」

そう言って彼女はリリィに色々しだした。

しばらくして、結局リリィは髪もさっぱり切ってもらい、服と靴も用意してもらった。

リリィ《すごい、さっぱりした！》

本人は嬉しそうだ。

相良「気に入ったようだよ」

????「イエイ」

何だかんだでやることはしっかりやってくれてるみたいだ。

????「んで、このすつきりヘアーと合わせると・・・」

そう言うとりリイの服と靴を装備した姿をみせた。

相良「おおゝ似合ってるじゃん」

パチパチと拍手するとリリイも釣られて拍手する。

????「気に入ってもらえて嬉しいなゝ!」

相良「でも、お代・・・こんな安くていいのか?ここまでサービスしてもらってさ」

????「まーあたしが趣味で作ったものだし」

趣味ね・・・にしてはこのクオリティの高さはお見逸れするな。

相良「趣味にしては、ほんとに上手だけだな」

そう言いながら俺は財布を取り出して金を払おうとする。

????「わお!きれーなリング!」

相良「おっ!？」

いきなり俺の右手首に付けられているリングに興味を持ってしまった。

??「これ純銀?彼女も付けてるよね?二人でお揃い?」

相良「あゝまあ、そんな感じかな」

そう言つて適当に対応するが、彼女の興味はそれだけでは収まらないらしく、俺のリングを取ろうとする。

??「ん?コレつなぎ目ないけど・・・どーやって外すの?」

相良「(やつバイ!!)」

リリイもあわあわしている。

相良「ま、それはこちらの理由つてことで、はいこれお代」

??「お」

俺は代金を渡し、リリイの右手を握る。

??「えー何か訳あり?力になれることがあつたら・・・って・・・え」

『リフレクト・ムーブ』

「???」おおっ!?!ちよ、おつり・・・おつり!?!」

相良「とっといていいよ!!服屋さんありがと!縁があつたらまた

「！」

そう言って俺とリリィはその場からいなくなる。

??「どーいたしました」

その後、俺達は旅行用休憩宿に泊まるのだった。

部屋は人部屋でベットは2つ。

過去にルチアと共に泊まってベットが一つと言う危険な事があったので、二度足は踏まないように聞いて判断したのだった。

俺はロード達をスリープモードにさせると、テーブルの上に置く。

相良「今から行くと教会につくのは夜になる。魔法を使えば話は別だけど、そのための魔法じゃないしリリイも疲れる。だから今日は一休みして明け方くらいにいけば丁度いいかな」

リリイ《うん》

俺は取り敢えず上着を脱いで半袖姿となってベットに座る。

リリイと対面になり、リリイは俺に言う。

リリイ《シヨウはすごいね。色んな事知ってる》

相良「まあここ二年間はずっと旅をしていたから」

リリイ《ずっと？》

相良「ああ。別に帰る場所がないわけじゃない。家族はいるし、仲間もいる」

リリイ《なんで一人なの？》

相良「・・・今回の旅は、“色んな意味”があつてな。色んな世界を見て、色んな発見をしたいなと思ってさ」

リリイ《へえ》

相良「旅は良いぞ。野宿なんて今の時代、そうは出来ない。他にも見たこともない発見があつたり、様々の人の優しさに触れることも出来る。一生の中でこんな発見があるなんて得だと思っただよ」

そう言いながらも俺は苦笑いしながら言う。

相良「あとはまあ、自分を鍛え直すためのとか・・・のんびり楽しく旅行をつてな」

リリイ《シヨウ、ごめんね・・・ありがとう》

相良「え・・・」

いきなりリリイは俺の目の前によって来てそう言った。

リリイ《旅行中だったのに助けてくれて、怖い目にあわせちゃったのに、優しくしてくれて》

上目遣いで涙目の状態でそんなことを言われる。

相良「べ、別にさ。俺が勝手にやったことだしさ・・・それに・・・」

リリイ《え・・・っ!?!?》

俺はリリイを抱き寄せ、言った。

相良「寂しいなんて言う人見つけてほっておく事が……俺には出来ないんだよ」

そう言って俺はリリイの頭を撫でる。

リリイ《ありがとう……シヨウ》

相良「いえいえ」

そして俺たちは眠りにつく。

相良「・・・って、この反応は・・・」

眠ったのは良いが、それから数時間後、先ほど出会ったあの女の子の反応があつて起きた。

相良「ロード」

俺はロードだけを持ち、静かに扉に向かう。

リリィ《（・〇）　ファ》

リリィは俺せいか起きてしまったが、喋れないのが幸いしてか、それほど響かない。

???「失礼します。こんばんは、地域警邏の者ですが・・・盗難事

件についてちょっとお話を」

相良「話しいいですが・・・」

俺は扉を開けて言う。

相良「なんでさっきの服屋さんがここに？」

???「お客様に大事なお知らせ」

彼女は突然現れ、ずかずかと部屋に入っていく。

???「キミら盗難で街で手配がかかってるみたいだけど心当たりが？」

相良「まあちよいと深い事情が・・・」

???「多分だけど、地域警邏がもうすぐ来るよ。逃げるんなら早めがいいかも」

相良「情報ありがと。服屋さんのサービスには行き届き過ぎなんだと思うが？」

そう言うとな彼女は不敵に言う。

???「ちつつちつち。まー中タイカした服屋さんってコトで。ついでに今なら裏路地ルートで脱出ガイドが格安なんだけどいかが？」

相良「はぁ・・・」

ロード「マスター。どうしますか？切りますか？突きますか？撃ちますか？」

相良「どれもこれも違う。・・・たく」

ま、ここで無益な争いになっても、街に迷惑かけるだけだしな。

リリイには悪いけど、さっさとここを出たほうがいいな。

そう決めた俺達はここを出ていった。

それからすぐ、地域警邏の人が来たのだった。

相良「服屋さん。ありがと、もうここらで大丈夫だけど」

アイシス「やだな」目的の地まで送ってくよ　あと服屋さんじゃなくて『アイシス』ね？」

相良「はあ・・・なんか、すごいことになってきたな（・・；）」

リリィ《？》

ロード「まあ話し相手がデバイスだけじゃなくなってよかったじゃないですか」

相良「あ、引きずってたんだ」

こうして新たな仲間にはアイスと言っ巻き込む・・・ではなく、巻
き込まれに行くことが好きそうな元気っ娘を連れて、賑やかな面々
で目的地に向かうのだった。

新たな仲間（後書き）

ここまで原作通りですね。

ヴァンも登場し、ルチアや奏多も登場して、物語りは動き出す。

てなわけでアイシスも連れて、次回は遂にあいつが登場。

4つ目の武器と約束と真実の為に 前編（前書き）

この小説、forceって案外描いていくのが難しい（――）

まあ頑張りますけどね。

4つ目の武器と約束と真実の為に 前編

相良 Side

俺達は深夜、ルヴェラ丘陵地帯で野宿をしていた。

焚き火用の枝をポキポキおりながら、アイシスと話しをする。

アイシス「ま、こーゆー野宿もたまになら楽しいよね」

相良「俺達はたまにじゃなくて基本的には毎日だけだな」

アイシス「え・・・それって楽しいの？」

相良「まあな。たまに湖の主とか言う奴がいる場所で寝てたり鳥獣の巣で寝たりしたこともあったけどな」

アイシス「・・・」

リリイ《仲良くなれたの？》

相良「ああ。最初は喧嘩とかしたんだけど、今じゃ親友くらいにはなってるんじゃないか？」

俺の話しにアイシスは苦笑いしつつも、自分から質問してくる。

アイシス「で、なんで二人は終われてんの？」

この人・・・笑顔で凄い質問してくるな・・・

相良「色々。アイシスには関係ないだろう？」

アイシス「だからその色々を詳しく聞かせてれてもいいじゃ〜ん！
！」

いきなり駄々をこね始めた。

アイシス「旅は道連れ世は情け！」

相良「・・・」

なんか、こう言う我侭な人と接するの、ほんとに久しぶりだな。

リリィ《あのねアイシス。ショウは私を助けてくれたの。だからシ
ョウは悪くないの》

アイシス「あ、ああそう・・・なんだ（これ念話？違う・・・精神
感応みたいなの・・・）」

相良「（アイシスもリリィの言葉が聞こえるってことは、魔導士か
？）・・・」

俺は取り敢えずアイシスの事を質問する。

相良「それで、今度はアイシスに質問なんだけど？」

アイシス「ん？」

相良「お前の荷物のなかからさ、物凄く危険物の臭いがするんだけど・・・俺たちをどうかするつもりか？」

アイシス「っ！？」

アイシスは即座にカバンに手を触れようとした。

相良「・・・取り敢えず、質問は一つだけ・・・お前は、俺たちの敵か味方か？」

そう聞くと、アイシスは笑顔で答える。

アイシス「味方に決まってんじゃ〜ん！だから、何があつたか教えてよ〜！」

相良「・・・（、）ハア...。ロード、教えてあげくれ」

ロード「了解しました。では説明させていただきます」

そう言つてロードは俺がリリィと出会うまでの経緯を話したのだつた。

アイシス「・・・」

アイシスは話を聴き終わると、啞然としていた。

相良「まあつまりだ。俺達は偶々研究所みたいなところにきて、殺されかけたりして今になるわけだ。施設の一部は壊したし、リリイを連れてったのは事実。でも、あの状況では仕方なかった」

そう言っただけ俺はロードを右手に持つて握る。

相良「ま、このまま逃げ続けても埒があかないから、次元通信が繋がる教会に行つて、信頼できる仲間に事情を説明してリリイのことや、あの研究室の事を・・・」

今の俺に、逮捕権も何もないからな。

ただの一般人……まあ今回の関係者で重要参考人になるわけだ
が……

相良「その人・・・ヴァンって言うんだけど、あいつは執務官や
てるからこの手の事件に対しては問題なく対応してくれるだろう。
さっきの地域警邏の奴ら、聞く耳も持たずって所だろうからな」

アイシス「そのヴァンって人はシヨウの兄弟？」

相良「いや、俺の愛弟子さ。あと、俺の彼女も手伝ってくれるだろ
う」

ロード「まあ説明したときは怒鳴られるのは目に見えてますけどね」

相良「言うな。覚悟の上なんだから（（（（（（；。（（（（（」

アイシス「彼女って・・・彼女置いて一人旅？」

相良「まあ、俺なりにはじめをつけたくてさ。あと、ある人と約束したからな」

アイシス「ふん」

相良「無理言つて、一人旅させてもらつてゐるから、あまり心配かけたくないんだけどな」

月二でメッセージは送っているのだが、まあ今月からは大変なこと

になるだろうな・・・

相良「あ、二人とも。はいこれ」

そう言つて俺は二人に暖かい飲み物を渡す。

リリイ《〜？》

アイシス「はふう・・・」

俺も一口飲んでため息をついて、空を見上げる。

相良「・・・ほんと、何も起こらなければいいけどな」

叶わぬ願いを、どうしても願ってしまうのだった。

アイシス「でも、気持ちはわかるかな。私も、家族にワガママ言つて進学前の長期旅行」

相良「へえ」

アイシス「でも、シヨウって私達より歳上だけど、仕事って何をしてるの？」

相良「え・・・あ、まあ・・・そうだな・・・」

俺は頬をポリポリと欠いてどう答えようか悩む。

アイシス「もしかして無職とかあゝ？」

相良「・・・ま、そんなところだろうな」

適当に答える。

アイシス「そんなこと言ってゝ魔法系の人でしょ？」

相良「なんで？」

アイシス「デバイス3つも持ってるし、何より女の子長い時間担いで走りっぱなし全然疲れてる様子ないし」

相良「そうだな・・・」

確かに、2年ぶりの大忙しだったのに、全然ばたつかないし・・・

リリイ《ごめんねショウ。わたし、ちゃんと歩くから》

相良「平気だよ。リリイ軽いし」

アイシス「いいなあ、あたしも背負って 軽いから？」

相良「なぜそうなる・・・」

まあアイシスの言うとおり、ほんとに俺は疲れていない。

かなりの距離を移動している上に、初めてリリイと出会ったあの日に放った巨大な砲撃？

あれを放ったとき、片手撃ちでリリイを抱きかかえていて放っていたのに、全く反動が無かった・・・

あの時の銃・・・いや、ナイフ？

名前は確か・・・

相良「EC・・・ディバイダー・・・」

『S t a e t U p』

相良「おうつ!？」

突如右手のリングが光だし、右手にあの時の銃と、左手には一冊の本があった。

相良「って……ええ？」

リリイ《……》

アイシス「（（（；。 ）（ ））」

リリイは悩ましい表情で、アイシスは怖がる様子で俺をみる。

ロード「何いきなり武器だしてるんですかマスター」

アイシス「ななな、なにナニツ！？暴力反対！！武装反対！！」

相良「違う！待ってくれ！！なんか、勝手に出来たんだよ！」

アイシス「なんじゃそりゃ！！！！！！」

俺とアイシスが慌ててるなか、リリイは冷静に対処法を言う。

リリイ《ショウ、『ブレード・オフ』で戻せと思う》

相良「あ、ほんと？なら……『ブレード・オフ』」

《Blade OFF》

そう言う俺の右手首のリングに戻っていった。

相良「・・・ふう。びつくりしたー」

アイシス・ロード「それはこっちのセリフっ!!」

二人のツツコミに若干驚くが、一度深呼吸して座る。

アイシス「今の何？シヨウのデバイス？」

相良「いや、俺のデバイスはロード、マルス、メルキュールだけだ」

ロード「ですね」

アイシス「リリイも詳しくは知らないんだよね？」

リリイ《うん。だし方と戻し方くらいしか・・・ごめんね、シヨウ》

相良「良いよ。記憶がないのは仕方ない」

俺も、記憶がない人の気持ちは分かるからな。

ロード「ですが、マスターとリリイ殿の腕輪やあの施設の秘密と関わりは、あるとみて間違いないですね」

相良「ああ。と考えると、俺のもつこれは・・・相当危険な武器だ」

取り扱い説明書が欲しいところだ。

相良「まあこれはゆっくり考えると、今日はもう寝よう。二人ともやすんで」

明け方になってからいくとするか。

アイシス「はあい」

リリィ《うん》

その後、二人は隣り合わせで眠りにつき、俺は監視の為に起きてロードと話す。

マルスとメルキュールの2機にはここから半径1キロ圏内の捜査に集中してもらってる。

ロード「それにしても、楽しいお友達ができましたね」

相良「友達と言うよりは、要救助者と勝手についてきたお人好し？」

みたいな人だろ」

ロード「それでもですよ。最初、私はマスターが旅に出ると聞いたとき、また独りで生きる事を決断してしまったのではないかと心配しましたから」

相良「・・・そう、だな」

もしかしたら・・・そうだったかもしれない。

けれど、リリイとの出会いは、今に繋がる。

アイシスと出会えたのだって、リリイと出逢って服と靴が必要だったからで、リリイがいなかったら出会うことはなかったのだから。

ロード「この出会いは、マスターが旅を終わりにさせる良いきっかけになると思いますよ」

相良「途中で全てを諦めるのは嫌だな」

ロード「全ては、どこでも見つかります」

相良「・・・きっかけが欲しいんだよ。託された約束と、俺の中のけじめ・・・」

これは一年前、旅を初めて1年経った時の話し。

俺は暇そうに旅をしていると、俺と同じく一人旅をしている少年と出会う。

相良「初めまして。俺は相良翔。デバイスはロード」

トーマ「俺はトーマ・アヴェニール。こいつはステイード」

ロード「よろしくお願いします」

ステイード「こちらこそ」

俺はトーマが旅を続けている理由を聞いた。

トーマ「6年前、ヴァイゼン遺跡鉾山の事故、知ってますか？」

相良「ああ。街が砕けて・・・230人くらいの人々は・・・」

トーマ「俺はあの事故に巻き込まれて・・・見たんだ。二人の腕に藍色の羽がついた奴らを」

相良「っ・・・まさか、お前はそいつらに復讐でもするつもりか！？」

トーマ「違う。俺はただ、“真実”が知りたいだけなんだ。事故なのか、“事件”なのか」

相良「・・・」

そして今。

相良「あの場にいたとされる・・・街を壊したかもしれない、誰か。調べた結果、7年前に公式記録で事故って断定されてしまったが・・・」

ロード「何か？」

相良「・・・犯人なんて、いないかもしれない。だけど“そうじゃないかもしれない”。俺も、トーマも、本当は知りたいのか知りたくないのか、もう過去の事を覚えていないのか。トーマが探しているのは、『踏ん切り』で、俺が探しているのは“真実”だ。俺はあいつと約束した、必ず真相を明らかにするって・・・」

ロード「マスターは、他人の背負っている過去まで、背負うつもりですか？」

相良「違う。一人で背負って欲しくないんだ。忘れたくない記憶があつて・・・忘れられない悲しみがあつて、つらい日々が続く。そんなの・・・嫌に決まってる」

ロード「マスター・・・」

心配そうな声が聞こえる。

相良「それに、俺はトーマの過去が終に向かつて欲しいんだ。あいつは自由に羽ばたいていいんだ。俺は・・・あいつの翼を羽ばたかせたいんだ」

ロード「・・・あなたらしいですね」

相良「嫌か？」

ロード「いえ。私の道は、マスターと同じ道ですから」

相良「助かる」

そう言つて俺はリリイ達の傍に向かう。

ロード「マスター。一つ聞いていいですか？」

相良「なんだ？」

ロード「マスターはリリイ殿を、どう思いですか？」

相良「・・・と、言つと？」

ロードが不思議な事を聞いてきた。

ロード「マスターはリリイ殿を救いました。その結果としてリリイ殿はマスターに懐いておりますが、ヴァン殿と合流後、いかなさるのですか？」

相良「・・・」

そう言えば、そうだな。

俺は、リリイを助けて・・・リリイの責任者みたいなもんだ。

ヴァン達に任せるのはどうかと・・・

相良「まあ、リリイが良ければ、俺の“家族”になってみないかって誘ってみるかな」

ロード「家族・・・ですか」

相良「ああ。家族に多いも少ないもないからな。ただ存在するかしないかだけだ」

ロード「そう・・・ですね」

そう言いながら、ロードはスリープモードとなる。

相良「・・・あ、ごめん。眠れなかったか？」

リリイ《ううん。寝てたから聞いてなかった》

アイシス「あたしも」

相良「そうか。ありがとう」

そう言うと、二人は笑顔で眠りについた。

俺は静かに、アイシスとリリイの頬を撫でて、空を見上げる。

相良「・・・？」

あれ・・・右手・・・すりむいたかな・・・

腕輪の部分が少し赤くなっていたのは・・・少し気にするくらいだった。

だが、この腕輪が、これから起こる騒動のきっかけになるとは、こ

の時に気づくことは出来なかった。

4つ目の武器と約束と真実の為に 前編（後書き）

次回はいよいよ戦いに入ります。

・・・武器4つって凄いね。

なのは「ねえ、私は登場しないの？」

ヴィヴィオ「私も登場したい！」

アインハルト「わ、私も！」

I K A「ちょっと待ってね。まだ待っててくれ」

全員「」「」「嫌だ！！」「」「」

相良「お願いだから待っててくれ」

全員「」「」「分かった」「」「」

I K A「相良すげー」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1985ba/>

魔法戦記リリカルなのはForce ~World Zero~

2012年1月5日20時50分発行